第一席

天下一の点前をめざして

飯塚市立飯塚第一中学校二年（福岡県）
白石 海優

中学校に入学し、一年が過ぎた頃、私は茶道部に入りました。一年生のときは吹奏楽部に入部していましたが、きつい練習や人間関係がきっかけとなり、体調をくずして、退部してしまいました。

そんなとき、ある友人から、茶道部に来ないかと誘われました。「作法など何一つわからない自分に、茶道などできるはずがない」と思いましたが、他にやることもなかったので、茶道部に入部したのです。

いざ、やってみると、しーんとした中でも温かみのある空間で、にぎやかな吹奏楽部とは全く違う世界だったことをよく覚えています。ただただ緊張し、自分が真っ白になったような感覚があり、視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚の五感を全て奪われたように、それはもう、白昼夢を見ているのではと錯覚するほどでした。

初めてのお点前は、たどたどしい手つきで、みんなのように上手くできませんでした。「最初は誰でもそうだよ」と励ましてはくれましたが、完璧主義の私は、ただ悔しさをもつことしかできませんでした。二回目も、形はできていても、自分では納得できない結果でした。

あるとき、千利休の逸話「天下一の点前」を読みました。それは、どんな点前でも相手を思う気持ち、ただ喜んでほしいという気持ちが大切ということでした。（ああ、そうか。私は完璧にしようとしていたのだ。私は茶道の本質を見失っていたのだ）と気づかされました。上手にできなくてもいい、ただこの空間、この時間を大切に楽しめばいい、相手を思う心を忘れないようにしようと心に刻みました。そして、三回目のお点前では、いつもと違い、少し安心できる緊張感がありました。静かな中で、茶を点てる音、茶の香り、味、床の間の花、掛軸の文字、人への優しいしぐさ、温かい声。茶室の中で感じたのは、安心と美しさでした。

今でも、茶道で慣れないことは多くあり、日々、新しい発見の連続です。苦手だったお点前は、だんだん好きになりました。茶道の一つ一つの動作は、人を敬うことや物を大切にすることからできていて、すてきだと思います。「天下一の点前」をめざして、茶道や日々の人との関わりを大切にがんばっていきたいと思います。